

黷淨紙、謬注口伝、<sup>30</sup>醜婢慮奈、<sup>31</sup>顏醜耳熱、<sup>32</sup>床觀拾文者、愧天慙人、忍事忘事、<sup>33</sup>作心之師、<sup>34</sup>莫心為師、<sup>35</sup>藉此功德、右腋著<sup>36</sup>福德之翮、而翔於冲虛之表、左脇觸<sup>37</sup>智慧之炬、而登於仏性之頂、普施群生、共成仏道也、

特己高德、刑<sup>38</sup>賤形沙弥、以現得<sup>39</sup>惠死、緣第一

諾樂宮御宇大八嶋國勝室心真聖武天皇、<sup>40</sup>發大誓願、以天平元年己巳春二月八日、於左京元興寺、備大法會、供養三宝、勅太政大臣正二位長屋親王、而任於供衆僧之司、時有沙弥、<sup>41</sup>濫就<sup>42</sup>饑餓供養之處、<sup>43</sup>捧鉢受飯、親王見之、以牙冊以罰沙弥之頭、々破流血、沙弥摩頭、捫血恸哭、而忽不覩、所去不知、時法會衆、道俗僣<sup>44</sup>謗之言、凶之、不善矣、<sup>45</sup>逕之二日、有嫉妬人、<sup>46</sup>譏天皇奏、長屋謀傾社稷、將奪國位、爰天心瞋怒、遣軍兵陳之、親王自念、無罪而被囚執、此決定死、為他刑殺、不如自死、即其子孫、令服毒藥、而絞死畢後、親王服藥而自害、天皇勅捨彼屍骸於城之外、而燒未散、<sup>47</sup>河擲海、唯親王骨、流于土左國、時其國百姓多死云、百姓患之、而解官言、依親王氣、國內百姓、可皆死亡、天皇聞之、為近皇都、置於紀伊國海部郡板村奧嶋、嗚呼憫哉、<sup>48</sup>福貴熾之時、高名雖振、<sup>49</sup>垂裔而妖、災霧之日、無所歸、<sup>50</sup>唯一旦滅也、誠知、怙自高德、<sup>51</sup>刑彼沙弥、護法噴<sup>52</sup>喊、善神慍嫌、著<sup>53</sup>袈裟之類、雖賤形、不<sup>54</sup>應不<sup>55</sup>恐、隱身聖人、交其中、<sup>56</sup>故、<sup>57</sup>僞慢經云、先生位上人、<sup>58</sup>釈迦牟尼仏頂、<sup>59</sup>佩履跣人、等罪云々、何況著<sup>60</sup>袈裟之

30 醜(國)醜(真)醜(勝)  
31 慮奈(真)奈慮  
32 醜(真)醜(勝)  
33 事(真)事(勝)  
34 作(真)作(勝)  
35 心(真)心(勝)  
36 腋(真)腋(勝)  
37 脇(真)脇(勝)  
38 刑(真)刑(勝)  
39 得(真)得(勝)  
40 聖(真)聖(勝)  
41 沙弥(真)沙弥(勝)  
42 就(真)就(勝)  
43 饑餓(真)饑餓(勝)  
44 僣(真)僣(勝)  
45 謗(真)謗(勝)  
46 嫉妬(真)嫉妬(勝)  
47 河(真)河(勝)  
48 憫(真)憫(勝)  
49 熾(真)熾(勝)  
50 滅(真)滅(勝)  
51 怙(真)怙(勝)  
52 噴(真)噴(勝)  
53 著(真)著(勝)  
54 應(真)應(勝)  
55 恐(真)恐(勝)  
56 交(真)交(勝)  
57 故(真)故(勝)  
58 釈迦(真)釈迦(勝)  
59 頂(真)頂(勝)  
60 著(真)著(勝)

1 極(真)極(勝)  
2 鉢(真)鉢(勝)  
3 謗(真)謗(勝)  
4 不(真)不(勝)  
5 爰(真)爰(勝)  
6 未(真)未(勝)  
7 河(真)河(勝)  
8 村(真)村(勝)  
9 災(真)災(勝)  
10 婦(真)婦(勝)  
11 釈(真)釈(勝)

人、打侮之者、其罪甚深矣、

見<sup>61</sup>鳥邪姪、<sup>62</sup>獸世修善緣第二

禪師信嚴者、和泉國泉郡大領、<sup>63</sup>血沼原主倭麻呂也、<sup>64</sup>聖武天皇御世人也、此大領家之門、有大樹、<sup>65</sup>鳥作巢產兒、<sup>66</sup>抱之而臥、雄鳥還飛飛行求食、養抱兒之妻、求食行之頃、他鳥過來而婚、<sup>67</sup>奸婚今夫、就心共高翳空、指於北而飛、<sup>68</sup>妻見不醜、于時先夫鳥、食物哺持來、見之無妻鳥、于時慈兒、抱之而臥、不求食物、而經數日、大領見之、使人登樹見其巢、<sup>69</sup>抱兒而死、大領見之、大慈愍心、<sup>70</sup>視鳥邪姪、獸世出家、離妻子捨官位、隨行基大德、修善求道、名曰信嚴、但要語曰、与大德俱死、必當同往生西方、大領之妻、亦血沼原主也、大領捨之後者、終無他心、々慎貞潔、爰男子得病、臨命終時、而白母言、<sup>71</sup>飲母乳者、<sup>72</sup>心延我命、母隨子言、乳令飲病子、子飲乳而歎之言、噫乎、捨母甜乳、而我死哉、即命終焉、然大領之妻、恋於死子、同共出家、修習善法、信嚴禪師、無<sup>73</sup>幸少緣、自行基大德、先命終也、大德哭詠作歌曰、<sup>74</sup>加良須止伊布於保乎蘇止利能去乎能、<sup>75</sup>未止母爾止伊比天佐岐陀智伊奴留、夫將火炬時、先備蘭松、將雨降時、兼潤石板、示鳥鄙事、<sup>76</sup>領發道心、<sup>77</sup>先善方便、見苦居道者、其斯謂之矣、<sup>78</sup>欲界雜類、鄙行如是、獸者背之、愚者貪之、<sup>79</sup>贊曰、可哉血沼原主氏、<sup>80</sup>瞰鳥邪姪、獸世俗塵、背浮花飯、趣常淨、身勤修善、<sup>81</sup>祈惠命、<sup>82</sup>心剋安養、期解脫、是世間異秀獸士者也、

1 沼(真)沼(勝)  
2 慈(真)慈(勝)  
3 也(真)也(勝)  
4 後(真)後(勝)  
5 乳(真)乳(勝)  
6 未(真)未(勝)  
7 火(真)火(勝)  
8 板(真)板(勝)  
9 沼(真)沼(勝)  
10 瞰(真)瞰(勝)  
11 祈(真)祈(勝)



よりは、自づから死なむに如かず」とおもひたまひて、すなはち其の子孫に毒薬を服ましまして、絞ひ死し畢りたまひて後に、親王薬を服みて自づから害したまふ。天皇勅して彼の屍骸を城の外に捨てしめたまひて、焼き末き河に散し海に擲てたまふ。ただし親王の骨のみ土左国に流したまふ。時に其の国の百姓多く死ぬと云ふ。百姓患へて官に解して言さく「親王の氣に依り、国の内の百姓みな死亡ぬべし」とまうす。天皇聞きたまひて、皇都に近けむが為に、紀伊国海部郡萩村の奥嶋に置かしたまふ。嗚呼、憫なるかな、福貴熾なる時には高き名は華と裔とに振ふといへども、妖災害むる日には帰る所無くただし一日に滅ぶ。誠に知る、自が高徳を怯みて彼の沙弥を刑ち、護法嗔嗔善神慥み嫌ふ、袈裟を著たる類は賤しき形なりとも恐りざるべからず、身を隠せる聖人其の中に交るが故なり、と。橋慢縫に云はく「先生に位上かりし人すら、釈迦牟尼仏の眞に履を履きて脚る人と罪等し」とのたまふ。何にいはむや、袈裟を著たる人を打ち侮るときは、其の罪はなほ深し。

鳥の邪淫を見て世を厭ひ善を修ふ縁 第二

禪師信嚴は、和泉国泉郡の大領血沼原主倭麻呂なり。聖武天皇の御世の人なり。此の大領の家の門に大なる樹有り。鳥巢を作りて兒を産み、抱きて臥す。雄鳥退く邇く飛び行きて食を求め、兒を抱く妻に養ふ。食を求めて行く頃に、他鳥通に來りて婚ふ。今の夫に結婚ひ、心就きて共に高く空に翫り、北を指して飛びて兒を棄てて墮す。時に先の夫鳥、食物を咄み持ち來りて妻鳥無きことを見る。時に兒を慈ひ、抱きて臥し、食物を求めずして數の日を経。大領見て、人をして樹に登りて其の巢を見しむれば、兒を抱きて死にてあり。大領見て、大に悲慙ふる心あり。鳥の邪淫を見て世を厭ひ出家し、妻子を離れ官位を捨て、行基大德に随ひて善を修ひ道を求め、名けて信嚴と曰ふ。ただし要り語りて曰さく「大德と俱に死に、かならず同じく西方に往生すべし」とまうす。大領の妻もまた血沼原主なり。大領捨てて後は、終に他心無く心慎みて貞しく潔し。爰に男子病を得、命終る時に臨みて母に白して言さく「母の乳を飲まば、我が命延ぶべし」とまうす。母子の言に随ひて乳を病者に飲ましむ。子乳を飲みて歎きて言さく「嗚乎、母の甜き乳を捨てて我れ死なむかな」とまうして、すなはち命終る。然うして大領の妻死に子に恋ひて同井しく出家し、善き法を修習ふ。信嚴禪師は、幸無く縁少く、行基大德より先に命終

一 正室の吉備内親王、その子の膳夫王、桑田王、葛木王、鉤取王(統紀・天平元年二月十二日条。藤原不比等の女(子)の子である安宿王、黄文王、山背王、教勝、は不死を賜う(統紀・天平宝字七年(宝字)十月十七日条)。二 本説話以外に所伝をみない。統紀・天平元年二月十三日条には、「遷・使葬・長屋王吉備内親王屍於生馬山」とみえる。三 本説話以外に所伝をみない。土佐は遠流の地(統紀・神龜元年三月条)。四 解は官への報告書。五 和歌山県有田市初島町の沖ノ島。長屋王の遺骨に関しては本説話以外に所伝をみない。六 護法善神は仏法を守護する神々。二句に分割されている。七 聖德太子平氏伝(雄略文・十二)所引の大唐臣僧傳(名記大和上鑑真伝に、長屋王が一千領の袈裟を唐の僧に贈つて供養したという記事がみえる。そのような伝承を知る諸書には、本説話に特に「袈裟」が言及されることに特別の感觸があらう。八 未詳。九 「うづ」の表記を「罰」「刑」「打」と変化させている。

第二縁 行基の弟子のひとりの厭世、出家、修善(往生暗示にとどめられる)が説かれる。

二 多くのばあい、夫が妻以外の女と、あるいは妻が夫以外の男と、交わること。夫婦間の交わりであつても時とばあいによつて邪淫とされることがある。在家の仏教信者の守るべき五戒のひとつに不邪淫戒がある。二 大阪府和泉市、泉大津市、泉北郡、岸和田市、貝塚市のあたり。三 天平十年四月五日付の和泉監正税帳に「郡司少領外徒七位下珍原主倭麻呂」とみえる。三 本説話では、鳥のばあいは「足」、人のばあいは「子」と書きわけられている。四 かわる

がわる。二五 上文にいう「他鳥」。妻鳥は新しい夫鳥に結婚つて。二六 大鳥郡をさすか。泉郡の北に位置する大鳥郡は、その名が鳥のイメージと結びつきやすい。また、大鳥郡は行基と関係が深い。二七 孝を称揚するさいに鳥の反哺を例にあげることがおこなわれた(たとへば芸文類聚・二十孝所引の梁武帝の孝思賦に「慈鳥反哺以報親」)。母鳥は口に含んだ餌を雛鳥に与えて養ひ、雛鳥は成長してから母鳥に口に含んだ餌を与えて恩がえしをする、ということである。このような鳥のイメージが、本説話では破壊されている。二八 阿弥陀仏の国土。極楽。二九 未詳。本説話以外に所伝をみない。三〇 鳥のばあいは逆の構図になっている。男は妻子を増やして、捨てられた事は子を(鳥のばあいとは異なり)養っている。三一 臨・命終時(二阿弥陀経)。三二 仏教の立場からは否定される「愛欲」「愛着」の心がある。三三 追善のために。三四 行基は天平二十二年(宝亀)二月二日に歿した(統紀)。

一 鳥というたいそう軽率な鳥が、ことばだけではいつしよに「と」言つて自分だけ先に行つてしまつたことよ。「からすとふ おほをそとりの」(万葉集・十四・三三)。本来は消えは共にあるいは共にあらむ」と誓ひ合つていながらも先立つた人を侮らぬ(小林真由美)。二 燭膏(香油。燈火用)にひたした松か。三 あらかじめ。四 石版は研書器のひとつ。雌雄の類(釈氏要覽下)。雨の降る前に潤う石の例として、白乳六帖・雨は古雨石の項をたて開元遺事引用。五 第三淫戒、名・非梵行、鄙陋之事、故言・非淨行也(菩薩戒經疏下。小林真由美の指摘がある)。六 大領。七 出家する。八 水に浮かぶ



る。大徳哭を詠ひて歌を作りて曰はく「からすといふおほをそどりのことをのみともに  
といひてききだちいぬる」とのたまふ。夫れ火を炬さむとする時はまづ蘭しき松を  
備け、雨降らむとする時は兼ねて石板潤ふ。鳥の鄙なる事を示て領道の心を発  
す。まづ善き方便をもちて苦を見し道を悟らしむといふは、其れ斯れを謂ふな  
り。欲界の雑の類は、鄙なる行是くの如し。歌ふ者は背き、愚なる者は負る。  
賛に曰はく「可きかな、血沼原主氏、鳥の邪姪を敵て俗塵を厭ひ、浮花の仮  
なることを背きて常浄に趣く。身は修善を勤めて惠命を祈ひ、心は安養を期り  
て解脱を期す。是れ世間の異秀に土を厭ふ者なり」といふ。

悪逆なる子妻を愛ひ母を殺さむことを謀りて現報に恵  
しき死を被る縁 第三

吉志火麻呂は、武蔵国多麻郡鴨里の人なり。火麻呂の母は、早部真留なり。  
聖武天皇の御世に、火麻呂、大伴名姓分所ならず筑紫の前守に点されて三年  
を経べくあり。母子に随ひて往きて相け軒養ふ。其の婦は国に留り家を守る。  
時に火麻呂己が妻を離れ去り、妻を愛ぶることに昇へずして、逆ふる謀を発

して思はく「我が母を殺し、其の喪に遭ひて服し、役を免れて還り、妻と俱  
に居む」とおもふ。母の自性、善を行ふことを心とす。子母に語りて言はく  
「東の方の山の中に、七日法花経を説き奉る大なる会有り。率、母聞け」と  
いふ。母歎かれ、経を聞かむと念ひて心を発し、湯を洗み身を浄め、俱に山  
中に至る。子牛の目を以ちて母を眺みて言はく「汝、地に長跪け」といふ。母  
子の面を瞻りて答へて曰はく「何故ぞ然言ふ。もし汝鬼託くや」といふ。子  
横刀を抜き、母の頸を殺らむとす。母すなはち子の前に長跪きて言はく「木を  
殖うる志は、彼の真を得並に其の影に隠れむが為なり。子を養ふ志は、子の  
力を得并に子に養はれむが為なり。恃める樹の雨漏る如く、何すれぞ吾が子  
思に違ひ、今異ふ心在る」といふ。子遂に聴かず。時に母佐際びて、身に著た  
る衣を脱きて三処に置き、子の前に長跪きて遺言して言はく「我れを誂はむ裏  
にせよ。一の衣を以ちては、我が兄男汝得よ。一の衣は、我が中男に贈り賜  
へ。一の衣は、我が弟男に贈り賜へ」といふ。逆ふる子歩み前みて母の頸を  
殺らむとする頃に、地裂けて陥る。母すなはち起ちて前み、陥る子の髪を抱き、  
天を仰ぎて哭きて願はくは「吾が子は、物託きて事をす。実の現心にあらず。  
願はくは罪を免し賜へ」とねがふ。なほ髪を取り子を留む。子終に陥る。慈母

花。水泡の美的表現か。ハ涅槃の徳である常、  
浄、を示して涅槃をあらわす。浮花のような仮  
の世を去つて涅槃の世界に行く。二〇仏の智慧。  
二一阿陀陀仏の国土。一極楽とは異訳の關係に  
ある。

第三縁 今昔物語集・二十ノ三十三に書承。  
二善老律では、八虐のひとつ。相父母、父母、  
に対しては殺つこと、殺さうと謀ること。伯叔  
父、姑、兄姉、外祖父母、夫、夫の父母、に対  
しては殺すこと。三米詳。本説話以外に所伝  
をみない。四多麻郡は東京都。鴨里は所在未  
詳。五米詳。本説話以外に所伝をみない。  
六中巻九縁の大伴赤麻呂の一族か。一七防人。  
一八兵士とすることを点とつた例は、軍防  
令にみえ、万葉集・二十巻三に「佐佐母里爾佐  
領」とある。一九上番の期間は防人は三年、た  
だし往復の日数は含めない(軍防令)。二〇軍防  
令では、征行するときに婦女をとまなうこと  
は禁じられを。本説話のばあい征行にはあた  
ないが、母が子の防人にしなない行くことは他  
に例をみない。子の火麻呂に対する母の愛着の  
強さがうかがえる。中巻三縁の母に対する子  
の愛着の強さに、イメージが結びついている。  
三令義解・軍防令によれば、妻妾をとまなう行  
くことは許されていた。しかし、万葉集十四  
二十、所収の防人の歌には故郷に残された妻を  
偲ぶものが多い。三原文「不昇」は「不勝」  
に同じ。一するに堪えられない。三令義  
解・軍防令によれば、上番の期間には父母の喪  
であつても任務はなされることはできない。火  
頭(炊事所)は例外。喪に遭つたという表現は令に  
みえる。四地蔵羅什訳の妙法蓮華経には、七  
巻に調卷されたものと八巻に調卷されたものと

があつた。後代の法華八講が八巻に調卷された  
妙法蓮華経に拠つておこなわれることより推測  
すれば、本説話は、七巻に調卷された妙法蓮華  
経に拠る講經の法会のことを述べているのであ  
らう。三国会図書館本釈釈(率イサ)。万葉  
集・三・五三卷三見(三)。人を誘うときに発  
する語。「率」をこの意に用いるのは日本におけ  
る引伸義。三ききわめて印象的な形容だが、他  
に例をみない。牛に因つてその目が記述される  
こと自体多くない。太平御覧九〇〇所引御明  
録・桓沖の「牛忽熟視」のように、憐憫を乞ふ目  
つきか。母に対する微妙な気持ちの表現。  
三「長跪」は、仏典語。六原文「託鬼」。下文  
に「託物」。「もの」の表記を「鬼」「物」と変化さ  
せている。二佩刀。三大般涅槃經・光明遍  
照章・寶德王菩薩品に「何人佩刀、為得摩訶  
為得花果及以財木」とみえる(敦煌補訂)。  
三失意のさまをあらわす。火麻呂が翻意しな  
いので落胆する。三原文「著身脱衣」。  
三わたしのことを使ふかたみの贈り物。  
三原文「一衣者、贈我中男一脱也」。「脱」は、  
本説話では、日本語の補助動詞「なまふ」を表記  
するために用いられている。本来は、上位の者  
が下位の者に与える意。三下巻四縁の筆が肩  
を殺そうとするイメージに結びついている。  
三天父の釈迦牟尼仏に対して重衡の心をいだ  
いた善星比丘が生きたが地獄に堕つた説話(大  
般涅槃經・迦葉菩薩品)・五逆をおこなつた提婆  
達多(五逆とされるが、父母に対する五逆は  
知られていない)が生きたが地獄に堕つた説  
話(たとへば増一阿含經・四十七)の、系譜につ  
りなる。三雄雄摩羅經・九・一〇九に、裂けた大  
地に陥る子の髪をとらえて助けようとした母の  
説話がみえる。本説話と下巻四縁とはともに沈